

あかしん

プランニング・デザイン・総合印刷・オンデマンドデジタル印刷・可変データ印刷
大判ポスター出力・データベース・PDF高速データ変換・CD-ROM制作・
3D・CGアニメーション企画・制作



半田中央印刷株式会社

〒475-0032 半田市潮干町1番地の21
TEL <0569> 29-2525 (代) FAX <0569> 29-4500
E-mail: main@handa-cp.co.jp http://www.handa-cp.co.jp

わが町、わが店、この道一筋。出逢いとコミュニケーション あかい新聞店ホームページ http://www.akai-shinbunten.net <発行所>あかい新聞店 武豊店/知多郡武豊町字金下37番地 ☎<0569>72-0356 常滑店/常滑市市場町4丁目167番地 ☎<0569>35-2861 企画・制作：株式会社新聞ビル

元氣のでてくることばたち 140

村上信夫

(アナウンサー)



Nobuo Murakami

生に向き合う作業に一応の区切りをつけた。太宰は、自分が選ばれた人だというプライドを持っていて、「自分の中にも、そういう嫌らしさはあ

何不自由なく育った「文学少女」で、芸術至上主義の「モダンガール」だった。戦争中、勤労働員の時、まわりがもんぺ姿でも、サングラス履きの洋装で、世間体にとらわれな

太田治子さんは、1947年11月12日に生まれた。父が、玉川上水で心中する半年ほど前のことだ。生前、会ったことはな

みんなちがってみんないい

作家 太田治子さん

作家の太田治子さんは、毎年この日を複雑な思いで迎えていた。太宰治の娘と云われることについては、ずっと抵抗があった。60を過ぎた今になっても、まだその肩書が付いて回るのか、というのが偽らざる心境だった。太宰治の愛人である太田静子を母に持つ「宿命の存在」ということを、なかなか受け入れられなかった。「身も心も日記も太宰に投げ出して、太宰の中で生かされる自分を見出したかった」という母の言葉を聞くと、高校生の頃は、身震いして逃げ出したかったという。

「と太田さんは素直に認める。成人式の時、テレビで朗読する機会があった。恥ずかしいですが朗読します」と言ったら、母が激怒した。「うまい」という気持ちがあるから、そういう言葉が出るのよ」

離婚。一方、太宰は、21歳で心中した相手の女性を死なせてしまっていた。苦しみと共に出来た。文学を諦めようとしていた静子に、太宰は「日記」を書くことを勧めた。その「日記」が起点となって、「斜陽」は生まれた。その「日記」は、静子と太宰との繋がりを更に深め、そして娘・治子の誕生へと繋がってゆく。

少女時代は、文章を書くこと、絵を描くこと、朗読することが好きな子だった。特に朗読が好きだった。母の留守中、母の画集を眺めて、ひとり空想に耽った。母の洋服を着て、自作自演のひとり芝居もしていた。こうして、想像力が培われた。大学は、明治学院。イギリス文学に没頭した。卒業後、いったん就職するが、作家の道を志した。奇しくも、父と同じ道を選んだ。

太宰作品から、ずっと逃げていた。読むと、心が重くなった。書いたのが父だと思ふと、よけい苦しくて、やりきれなかった。ただ娘として、太宰のことが、正確には伝わっていないのではないかという思いもあった。

母は、太宰に対しても「サルスベリ」のように、くねくねと捻じ曲がっているから、男の子が生まれたら、真っ直ぐな樹、正樹にしたらい」と直言した。太宰は、ほんとうにそうした。太宰は、良い部分、悪い部分にも体当たりしてくれる母のような存在が嬉しかったのではなからうか…。

母・太田静子は、九州の御典医を先祖に持つ、医師の娘として、滋賀県に生まれた。



俳画/イネ・セイミ

村上信夫プロフィール
NHK エグゼクティブアナウンサー
1953年、京都生まれ。明治学院大学卒業後、1977年、NHK入局。富山、山口、名古屋、東京、大阪に勤務。現在は、『ラジオビタミン』担当。(ラジオ第一 8:30~11:50) これまで、『おはよう日本』『ニュース7』『育児カレンダー』などを担当。教育や育児に関する問題に関心を持ち続け、横浜市で父親たちの社会活動グループ『おやじの腕まくり』を結成。趣味は、将棋。著書に『元氣のでてくることばたち!』(近代文芸社) 『おやじの腕まくり』(JULA出版局) 『いのちの対話(共著)』(集英社) 『いのちとユーモア(共著)』(集英社)

「魅力」もあつた。「危ないけれど、愛おしい」矛盾の魅力に、読者は魅かれるのではないだろうか。治子さんは分析する。みすゞの詩の一節に有名な「みんなちがってみんないい」という言葉がある。太宰作品と向き合う過程を経て、ようやく太田さんも、みんなちがっていい心境に到達した。

ことばのビタミン
好評発売中

イネ・セイミプロフィール
フルート奏者として活躍中。俳画家。絵画を幼少より日展画家の(故)川村行雄氏に師事。俳画を華道彩生会家元(故)村松一平氏に師事。俳画の描法をもとに、少女、猫等を独自のやさしいタッチで描いている。個展多数。

俳画教室開講中
とき 常滑屋
と き 月一回 第二・第四金曜日
午後一時~三時
会費 一回 二二五〇円(三ヶ月分前納制)
問合せ ☎〇五六九(三五)〇四七〇

おとなのフルート教室
大人でも上達する！
何か始めたいと思っているあなた。数年後、素敵にフルートを奏でる姿がそこにあります。楽しく個人レッスン致します。

入会受付中!!

講師 **イネ・セイミ**
(フルート奏者 指導歴30年)
1レッスン・時間5,000円(チャイムタイム付)
申込み 0569-89-7127
お問合せ scimline@oasis.ocn.ne.jp

愛知県立大学名誉教授

山田正敏

『バリ島行ったり来たり』(30)



《伝統的な

『バリ島の村に住む』⑬

——鬱病をも癒した、

田舎の生活環境⑫——

味わったことのない“気分”である。

「のどか」という言葉を二・三の辞書で改めて調べてみた。バリ島の地で実感する「のどかさ」という私の気分を確かめるためにも——。

『のどか』とは、「のんびり」と「おちついて」、「静かなさま」を言うようである。

私は、あの音色とそれを刻む割合の気まぐれに、「のどかさ」を覚える。この音があればこそ、その割合の不揃いのリズムがあればこそ、私は「のどかな気分」に浸って行ける。「静かなさま」とは、必ずしも「無音状態」ばかりを指すようでもないようだ。

この音が、あちらこちらの部落から聞こえるようになるのは、決って、毎年二月から三月にかけての屋下がり……。雨季明け間近とはいえ、青く澄み渡った天空に、交互に鳴り亘る。固いような柔らかなような「音色」である。

私が、この音を、ゆたりと聞くことができるのは、私が既に、この音源と、その由来を知っていたからである。そうでなければ、「何んだろう……？」の疑問に苛まれ、「のどかな気分」を味わうどころではない。「知る」ということは、「ゆとり」

を与え、集中力を高めてくれるもの

——とは、良くいったものだと思う。この「のどかな音源」とその由来を知ったのは、滞在地完成二・三年後のことだと思ふ。十年余りも前のことであり、記憶も定かではないが、この件については部分的ではあれ、かなり鮮明に思い出される。

当時、中学生になったばかりの管理人の次男N君が庭先の空地に、太い一メートルほどの切り出し早々の、竹筒を二本とカーバイト（アセチレンガス発生用の鉱石）の塊を持ち込み、その塊を金槌で砕いている。妹のコマンが、その助手——。

「アパー（なに？）——」。

「ブオン、ブオン」……。

直径10センチほどの肉厚の青竹の筒に、3センチほどの切り込みの穴。竹筒の一方は節を残して切断。一方は節を抜いて、紙がキツク詰め込まれている。見事な「青竹の加工」である。

これだけ目と耳で説明を「見聞」すれば、それが、辺りに鳴り亘る音色の空砲の装置であることは、容易に推測できる。その目的と由来を聞いてみる。

コマンは答えて——。

「ニユピ」「ニユピ……」

《バリ島の
年中行事「ニユピ」》

バリの人々は、次つぎに巡っていくる宗教儀礼や祭礼、そして日常生活にまつわる事柄を、「バリ暦」に従って、忠実に実行している。この「ニユピ」も、その一つである。

バリの人々の多くは、歴代水田耕作を行ってきたが、これらの農事暦は、月の満ち欠けを基準にしたバリ特有の「サカ暦」に基づいている。この暦の最大の儀礼が、「ニユピ」といわれる二日間に亘る祭儀である。これは毎年だいたい日本の春の彼岸の時期にあたる。日本の観光ガイドブックは、この日を一樣に、「バリの正月」と紹介しているが……。

ニユピの前日には、夜にかけて、どの村でも日頃の「穢れ」を祓い清める儀礼が、盛大に行われ、バリ中が騒然となる。

夕刻になると各家庭で松明が焚かれ、鍋や空缶を打ち鳴らしながら敷地内を練り歩く。そこに潜んでいる悪霊達を追い払うためだ。子ども達は、道路で爆竹を鳴らしたり、竹筒を叩いて大騒ぎしながら村中を練り歩く。

大人たちは、日暮れまで、村のあらゆる十字路で、悪霊に供物をそなえ、「村人の安全」を守ろうとする。

夜には、村人は灯をもって各家を回る。この時、村の青年団の若者達が趣向を凝らし、月・日をかけて、村々の集会所で造り上げた「オゴゴ」と呼ばれる、巨大な張りぼての妖怪を象った御輿をかついで行列して歩く。迫力満点のおどろおどろしさである。

バリの人々には、「ニユピ」の日のように、月が全く出ない「新月」の日には、天界の神々が大神除をするので悪霊が追い出され、地上にやってくるかと考えられている。この「悪霊祓い」の最大の儀礼が「ニユピ」ということになる。

ニユピの当日は、一ヶ月ほど前から始まる「のどかな砲声」、前日に最高潮に達する「悪魔祓いの騒々しさ」が、嘘のように静まり返る。

この日、バリの人々はあらゆる日常活動を止め、誰も家の中に引きこもる。火も灯も禁止され、「静寂と

瞑想と祈り」の日を送る。

ニユピは、全島一律の儀礼の日であり、赤ん坊と病人のいる家は例外として、観光客も例外ではない。外出、外食もできない。

陽気で寛容にみえるバリの人々も、この「バリ暦の教え」には、厳格である。この教えを踏まえて、それを巧みに脚色・演出し、見事に演じきる大人も子どもも名優である。バリの人々のもう一つの目には見えない存在（悪霊）との付き合い方の見事さを、「ニユピ」の儀礼に見た思っている。



オゴゴ

絵本 『いっぱいともだち』

武豊小学校3年
水野 は菜

登場
キャラクター



クマ



まぐまくん

とり



こつぼくん

リス



ミーンちゃん

ウサギ



ミミコちゃん

キツネ



コンタくん



知多の動植物雑記(二六一)

原 穰

この時期、知多半島の明くさやかな緑の野を歩けば、道端や田の畦に並び咲く小形の菊を思わせるハルジオンが美しい。



道端の花、忘れられた木の实

東浦町で川の生き物調査をやった帰り道で、南に広がる広大な田畑に接する小川の土手に、乱れ咲くハルジオンの美しさに魅せられ、車を停めて写真にした記憶がよみがえる。

町の考古学

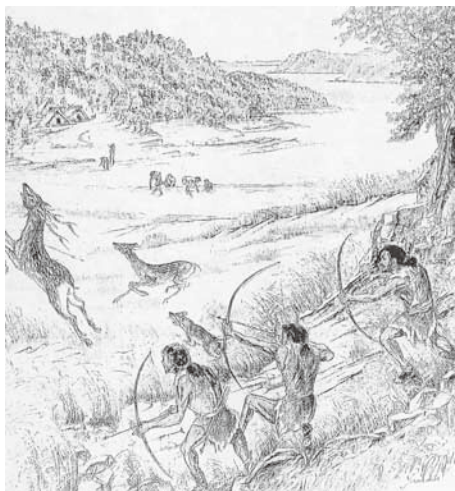
古代の塩づくり(百五十二)

奥川 弘成

遺跡

海外では自然に産出する岩塩や天日と乾燥によつてできる湖塩や海塩など自然塩が大量に産出します。

三世紀に三河湾に畿内から移入された土器製塩がアユチ瀉にもちこまれて以降、農耕を中心とした弥生文化から別つように、海民文化が伊勢湾と三河湾に花開き始めます。



獣を捕る縄文人(山下勝年先生画)

下がる蕾がそこそこ、よし、OK!とは云いながら、これが家の近くで撮ったものなら、早速現場を尋ね、茎をハサミで切つてみれば、中は中空で空っぽになつており、葉は基部が茎をささみ込んでいます。

このままでは、そこまでは思い悩み、現場を尋ねれば、河川整備で雑草なし! かくなる上はと、植物のことなら何でもという吉川洋行氏を尋ね、写真を見せれば「ハルジオンです」と。

三世紀に三河湾に畿内から移入された土器製塩がアユチ瀉にもちこまれて以降、農耕を中心とした弥生文化から別つように、海民文化が伊勢湾と三河湾に花開き始めます。

三世紀に三河湾に畿内から移入された土器製塩がアユチ瀉にもちこまれて以降、農耕を中心とした弥生文化から別つように、海民文化が伊勢湾と三河湾に花開き始めます。

これまでに人口の多い集落でした。人口が増えれば限られた動物資源を取り合うこととなり、弥生時代になり米作りが盛んとなれば、単純にムラの形成と人口増加を語るところですが、米だけでは生きていくことはできません。

本にもたらされたか明確でありませんが、縄文時代後期に関東から東北地方で製塩がはじまったとする説があります。

九条を生かせ憲法記念の日風薫る日女児のまつ毛伸びて来し幼な葉の幾何万に木の芽雨藤の葉垂る花房も良し庭香る藤なる満月も良し庭香る夏富土の白き帽子の際立てり膝に立つ赤子の力子供の日肘杖にすに痺れて傘雨の忌浜の砂の白さや春の海宮殿の庭に満開チューリップ山藤は大木登つて咲き競う耕田に水張られゆき雲流る石置割りにたんぼぼ咲きにけり庭先の朝日に映る花水木満開をまつりに合わす桜かな穂の芽を貫いて切り切る夕支度連休のごみ出し一番重分良し真っ白のシャツ眩しや庭若葉曾孫作不揃い嬉し蓬餅

中国沿岸地での古代製塩の遺跡研究が進み、日本が弥生時代であった以前に器を使つての塩づくりが行われていたことが分かっています。

シルバースクール 健康にイキイキと楽しく過ごそう! 十六日(七月七日) 毎水全四時~五時 同十七日(七月八日) 毎木全四時~五時 同十八日(七月九日) 毎金全四時~五時 同十九日(七月十日) 毎土全四時~五時 同二十日(七月十一日) 毎日全四時~五時

知多地域文化センター 開館時間変更のお知らせ 六月から八月まで、開館時間を午前九時から午後五時まで延長します。

若竹俳壇 作品募集 毎月十日までに葉書で 発行所へ

若竹俳壇 作品募集 毎月十日までに葉書で 発行所へ

親業体験! 兄弟げんか! 上手に間に入るには! (八月八日) 午前九時~四時 参加費 千円 問合せ 親業サークル 稲葉 72-7138

親業体験! 兄弟げんか! 上手に間に入るには! (八月八日) 午前九時~四時 参加費 千円 問合せ 親業サークル 稲葉 72-7138

写真左上は桑の実。以前民家で養蚕をやつた頃の名残か、今も時折道端に。かつては学校帰りのおやつとして食べ、口を真っ青にしていたが今や遠い昔物語。

写真左上は桑の実。以前民家で養蚕をやつた頃の名残か、今も時折道端に。かつては学校帰りのおやつとして食べ、口を真っ青にしていたが今や遠い昔物語。

写真左上は桑の実。以前民家で養蚕をやつた頃の名残か、今も時折道端に。かつては学校帰りのおやつとして食べ、口を真っ青にしていたが今や遠い昔物語。

写真左上は桑の実。以前民家で養蚕をやつた頃の名残か、今も時折道端に。かつては学校帰りのおやつとして食べ、口を真っ青にしていたが今や遠い昔物語。

写真左上は桑の実。以前民家で養蚕をやつた頃の名残か、今も時折道端に。かつては学校帰りのおやつとして食べ、口を真っ青にしていたが今や遠い昔物語。

写真左上は桑の実。以前民家で養蚕をやつた頃の名残か、今も時折道端に。かつては学校帰りのおやつとして食べ、口を真っ青にしていたが今や遠い昔物語。

写真左上は桑の実。以前民家で養蚕をやつた頃の名残か、今も時折道端に。かつては学校帰りのおやつとして食べ、口を真っ青にしていたが今や遠い昔物語。

写真左上は桑の実。以前民家で養蚕をやつた頃の名残か、今も時折道端に。かつては学校帰りのおやつとして食べ、口を真っ青にしていたが今や遠い昔物語。

写真左上は桑の実。以前民家で養蚕をやつた頃の名残か、今も時折道端に。かつては学校帰りのおやつとして食べ、口を真っ青にしていたが今や遠い昔物語。

写真左上は桑の実。以前民家で養蚕をやつた頃の名残か、今も時折道端に。かつては学校帰りのおやつとして食べ、口を真っ青にしていたが今や遠い昔物語。

写真左上は桑の実。以前民家で養蚕をやつた頃の名残か、今も時折道端に。かつては学校帰りのおやつとして食べ、口を真っ青にしていたが今や遠い昔物語。

写真左上は桑の実。以前民家で養蚕をやつた頃の名残か、今も時折道端に。かつては学校帰りのおやつとして食べ、口を真っ青にしていたが今や遠い昔物語。

写真左上は桑の実。以前民家で養蚕をやつた頃の名残か、今も時折道端に。かつては学校帰りのおやつとして食べ、口を真っ青にしていたが今や遠い昔物語。

写真左上は桑の実。以前民家で養蚕をやつた頃の名残か、今も時折道端に。かつては学校帰りのおやつとして食べ、口を真っ青にしていたが今や遠い昔物語。

写真左上は桑の実。以前民家で養蚕をやつた頃の名残か、今も時折道端に。かつては学校帰りのおやつとして食べ、口を真っ青にしていたが今や遠い昔物語。

写真左上は桑の実。以前民家で養蚕をやつた頃の名残か、今も時折道端に。かつては学校帰りのおやつとして食べ、口を真っ青にしていたが今や遠い昔物語。

写真左上は桑の実。以前民家で養蚕をやつた頃の名残か、今も時折道端に。かつては学校帰りのおやつとして食べ、口を真っ青にしていたが今や遠い昔物語。

写真左上は桑の実。以前民家で養蚕をやつた頃の名残か、今も時折道端に。かつては学校帰りのおやつとして食べ、口を真っ青にしていたが今や遠い昔物語。

写真左上は桑の実。以前民家で養蚕をやつた頃の名残か、今も時折道端に。かつては学校帰りのおやつとして食べ、口を真っ青にしていたが今や遠い昔物語。

写真左上は桑の実。以前民家で養蚕をやつた頃の名残か、今も時折道端に。かつては学校帰りのおやつとして食べ、口を真っ青にしていたが今や遠い昔物語。

写真左上は桑の実。以前民家で養蚕をやつた頃の名残か、今も時折道端に。かつては学校帰りのおやつとして食べ、口を真っ青にしていたが今や遠い昔物語。

写真左上は桑の実。以前民家で養蚕をやつた頃の名残か、今も時折道端に。かつては学校帰りのおやつとして食べ、口を真っ青にしていたが今や遠い昔物語。

写真左上は桑の実。以前民家で養蚕をやつた頃の名残か、今も時折道端に。かつては学校帰りのおやつとして食べ、口を真っ青にしていたが今や遠い昔物語。

写真左上は桑の実。以前民家で養蚕をやつた頃の名残か、今も時折道端に。かつては学校帰りのおやつとして食べ、口を真っ青にしていたが今や遠い昔物語。

写真左上は桑の実。以前民家で養蚕をやつた頃の名残か、今も時折道端に。かつては学校帰りのおやつとして食べ、口を真っ青にしていたが今や遠い昔物語。

写真左上は桑の実。以前民家で養蚕をやつた頃の名残か、今も時折道端に。かつては学校帰りのおやつとして食べ、口を真っ青にしていたが今や遠い昔物語。

写真左上は桑の実。以前民家で養蚕をやつた頃の名残か、今も時折道端に。かつては学校帰りのおやつとして食べ、口を真っ青にしていたが今や遠い昔物語。

写真左上は桑の実。以前民家で養蚕をやつた頃の名残か、今も時折道端に。かつては学校帰りのおやつとして食べ、口を真っ青にしていたが今や遠い昔物語。

写真左上は桑の実。以前民家で養蚕をやつた頃の名残か、今も時折道端に。かつては学校帰りのおやつとして食べ、口を真っ青にしていたが今や遠い昔物語。

写真左上は桑の実。以前民家で養蚕をやつた頃の名残か、今も時折道端に。かつては学校帰りのおやつとして食べ、口を真っ青にしていたが今や遠い昔物語。

写真左上は桑の実。以前民家で養蚕をやつた頃の名残か、今も時折道端に。かつては学校帰りのおやつとして食べ、口を真っ青にしていたが今や遠い昔物語。

写真左上は桑の実。以前民家で養蚕をやつた頃の名残か、今も時折道端に。かつては学校帰りのおやつとして食べ、口を真っ青にしていたが今や遠い昔物語。

